



待降節にはクリスマスツリーやベルなどを模したブローチを洋服に飾って祝福の気持ちを表わします。日本じゅうがクリスマス一色ですから堂々とつけていられます。私が母・綾に連れられ、初めて教会に行ったのは昭和10年代、大叔母・田中米が通う大久保の教会でした。米は祖母のすぐ下の妹で和歌山の山奥まで宣教師レヴィット女史とともに伝道活動をし、ウエルミナ女学校（現大阪女学院）の第1回生となった人。夫は寺の出身でしたが、キリスト教を学び、その教義の誤りを見いだそうとし

て逆に入信、神学者になった人でした。今年のNHK大河ドラマ「重の桜」は明治維新後の新生日本が舞台ですが、大叔母たちが生きた時代と重なり胸が熱くなります。私にとって教会は、学長の立場を離れ、心からくつろげる大きな家族のような場です。子どもたちの写真を撮っては贈り物としていきます。その子らが大きくなったときに1枚の写真から、両親や周囲の人々と教会で過ごした貴重な時間を思い出してくればそれで充分です。私ができるささやかな伝道活動でもあるのです。

日々の暮らしに

香川芳子 女子栄養大学学長

教会は大きな家族、  
心からくつろげる  
場であるのです

※たなかよね ●女子栄養大学の前身・家庭食養研究会時代から、講師として家庭料理を教え、